はじめに

はじめに

近年の持続可能社会への取り組みに対して、自然と人間をつなぐ公園としての役割が注目されている。

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災以降、様々な復興の途上にあり、特に福島においては、原子力発電所事故の影響もあり、震災 10 年を踏まえて、今後の魅力を創造していく時期になっている。福島県白河市は、長い歴史の中で白河関跡や小峰城跡などと共に観光資源に恵まれた土地であり、その中核である白河関跡に近接した、白河関の森公園の利活用のための調査を行うこととなった。

持続可能な社会を形成するためのまちづくりの基本は、住民参加、地域主体によるまちづくりのプロセスの構築であり、アンケート取得など地域住民の意向を充分に踏まえながら、公園の先端動向も踏まえ、新たなチャレンジとして自然と歴史が融合する 21 世紀型の公園を目指して提案を行っていくものである。

基本構想の策定に向けて、策定委員会は全 5 回行われ、地域住民や専門家、関係者による活発な議論が行われた。その中で、見出された方向性としては、白河市の地域資源を生かした、白河らしい公園のあり方を創造していくことである。特に、奥の細道でも詠まれた白河関跡などの歴史の再生、里山の風景を残す自然環境を生かした、これまでの既存施設の利用と新たな利用の提案がなされた。この中で、特に体験型の森づくり、地域の様々なステークホルダーとの共創によるコモンズデザインが重要であると導かれた。また、公園づくりは単に健康づくりや交流の場だけではなく、地域資源を生かしたコミュニティビジネスの創生の場としての拠点形成が重要である。今後、白河市の総合計画等との連携を図ることにより、関の森公園を核にした交流人口の増加やその先にある定住人口の増加を目指した総合的な政策として展開する必要性が導かれた。

近年、政府は SDGs やカーボンニュートラルの政策を推進しており、これらの動きとも連動する地域のエネルギーを活用したゼロエネルギー公園や地域主体の持続可能なコミュニティ創りを視野においた先端的なまちづくりを進めていくことが期待される。本計画で導かれた基本構想のコンセプトを基に、さらなるアクションプランの具体化を行い白河関の森公園のビジョンを構築していくものである。

白河関の森公園基本構想策定委員会 委員長
宮城大学 理事・副学長・教授
風見正三